

シェイクスピアの強意語

三輪 伸春・内田 裕子*

はじめに

特定の単語を頻用するとその単語の意味は弱められる傾向がある。例えば、元来、即時的未来 ‘at once’ を意味していた *immediately*, *soon*, *anon*, *presently*, *by and by* 等の語は、「きちんと時間を厳守することを何となく心のどこかでいとう人間の性癖 (*procrastination*)」によって意味が広げられ、弱められて、現在では近時的未来 ‘before long’ を意味するようになった (cf. J.B.Greenough & G.L. Kittredge, *Words and their Ways in English Speech*, 1920, p.293)。このような人間心理が原因となって、単語の意味は弱まる場合がある。そしてその語の意味が弱まり陳腐になると、その意味を補うために別の単語によって取って代わられる。こうして意味は変化し、次々と新語が生み出される。その代表的なものが強意語である。

強意語とはいったいどのようなものなのか。stoffel (C.Stoffel, *Intensives and Down-toners*, 1901), フランツ (W.フランツ, 『シェイクスピアの英語』) をもとに、下のように定義できる。強意語とは、形容詞・副詞・動詞の表す性質・動作の程度・強度を高める副詞である。それらの語は、最初は単に程度・強度を高めるだけではなく、その語の持つ特殊な意義の香りを漂わせているが、頻繁に使用されるにつれてその香りが失せ、陳腐な強意語となってしまふ。そこで、奇抜な誇張的表現を工夫するようになり、強意語に新陳代謝が行われることになる。また、強意語は、時代と共に変化するばかりでなく、同

*平成12年卒業，沖永良部高校教員

一の時代においても社会階層によって異なり、各時代、各社会にそれぞれに特有の強意語がある。

シェイクスピアの作品に *passing* を強意語として用いた *passing fair* が 5 例みられる。

- (1) Is she not *passing fair* ? TGV IV.4.148
- (2) Love, whose month is ever May,
Spied a blossom *passing fair*
Playing in the wanton air: LLL IV.3.100~102
- (3) Show me a mistress that is *passing fair*,
What doth her beauty serve but as a note
Where I may read who pass'd that *passing fair* ? ROM I .1.234~236
- (4) Love, whose month is ever May,
Spied a blossom *passing fair*,
Playing in the wanton air: PP. 16.2~4

これらに見られる一見現在分詞形の強意語 *passing* は一体何か。シュミットの *Lexicon* によると、形容詞と副詞の前にのみ用いられ、‘exceedingly’ を意味するという。またフランツの『シェイクスピアの英語』には、以下の説明がある。

今日廃れた *passing* ‘exceedingly’ は、17世紀に非常によく用いられた強意語であったが、ただ形容詞及び副詞の前にのみ現れる。

(フランツ, 『シェイクスピアの英語』, p.558)

そこで、なぜ現在分詞形が強意語になるのか、また一般的に強意語とは何か、どういう語が強意語になりうるのか、それぞれの語の特徴は何なのかを考えてみる。

まず、強意語とは一体何か。ストッフエルは『強意語と緩和語』の中で、強意語について以下のように述べている。

形容詞や副詞を修飾する強意語について一般に言えそうなことは、その大部分が「絶対性」をあらわす形容詞、すなわち pure, full, very などのように性質の変異を許さず、極めて厳密な意味で比較というものを許さない形容詞に由来する副詞であるということである。

しかし、もともと「完全性」をあらわしたこれらの強意語の大部分は、やがて単にある性質の「程度が高いこと」を意味するようになった。そしてこのことは語史に関しての確立した事実の一つとぴつたりと合致するもので、頻用はとかく語の意味を弱めがちになるということである。一般の話者は誇張されたことばを使いたがり、オーバーな表現をしたがるので、こういう目的で使われた語そのものが一般評価では割引され、掛け値なしに受け取られるようになるが、このありのままの評価は、原義的に意味するものよりは通例はるかに下回るものである。

もしこの種の語を原義どおりの意味に理解すべきであるということを知り、聞き手に強く印象づけようと思うと、そのためには聞き手の注意を促す異常な強調が必要である。(中略)

このように多数の強意語などになる副詞が、原義的には「完全さ」をあらわしているのに、その意味が弱まりその結果高度とか相当程度という観念をあらわすようになっていく。こうした変化は常に起こっているため、絶えず新語が要求されている。というのは、従来の語では性質の完全さとか、問題の状況下で可能な最高度の観念を表現するのに不適切だと感じられるからである。つまり、ある種の副詞では意味が絶えず弱まり強意的でなくなっているため、それに代わって他の語が性質の完全性を表現しなければならなくなる。(ストッフエル、『強意語と緩和語』, pp.1~2)

つまり、強意語は一般に比較を許さない形容詞に由来する副詞である。しか

し「完全性」をあらわす強意語の大部分は、単に「程度が高いこと」を意味するようになった。というのも人間は誇張されことばを使いたがり、オーバーな表現をしたがるので、聞く側が意味を割り引いて聞くためもとの意味が弱まる。つまり頻用することで、語は本来の意味を失う。このような変化は常に起きているので、絶えず新語が要求される、ということである。

ストッフエルの説をふまえてフランツは『シェークスピアの英語』（第二版）で、

大体から言って、強意語というものは非常に移り易く、変化し易い性質のものである。抵抗力が殆どなく大抵は生命力も長くないので、それは安定性の殆どない表現手段の一つである。ある一つの意味から発して、それは先ずその意味の範囲内で発達するが、使用度が大きいのでこの範囲を越えるようになり、周囲の事情が幸いすれば、大いに普及して全く純粹の強意語となり終り、遂にはこの機能では余りにも平凡、無内容のものとなってゆく。そうするともっと表現力のある強調手段を求める心が、ほかのものをその代わりに登場させる。そこで強意語の間では、いつの時代も、造語はしないにしても大抵は新語形を好むということになってくる。というのは、すべての社会層はその教育、職業、人生観に従って、それ特有の強意語を用いるからである。

（フランツ、『シェークスピアの英語』、1909、p.552）

と述べている。つまり、強意語は変化し易い性質で、抵抗力が殆どなく生命力も長くない。使用頻度が大きいとその意味は弱まり、別の語が要求される。またすべての社会層はその教育・職業・人生観に従って、それ特有の強意語を用いるので、常に新語が要求される、ということである。

ストッフエルやフランツ以外にも、ブルックやシェーラー、市河三喜なども強意語について述べている。それらを基に強意語は以下のように定義される。

強意語とは、形容詞・副詞・動詞の表わす性質・動作の程度・強度を高める

副詞のことである。それらの語は最初は単に強度を高めるだけでなく、その語の持つ特殊な意義の香を漂わせているが、頻繁に使用されるにつれてその香が失せ、陳腐な常套的な強意語となる。そこで奇抜な思いつきや誇張的表現を工夫することにより、強意語には烈しい新陳代謝が行われるようになる。また強意語は、時代的に変化するだけでなく、同一時代においても社会層によって異なる。つまり各時代、各社会にそれぞれ特有の強意語があるのである。

上記の定義で強意語は「時代的に変化する」と述べたが、その最もはっきりした例は、今日よく用いられる awful(ly), jolly, precious, tremendously などの強意語が、シェイクスピアでは未だ全然知られていないということである。また逆に、シェイクスピアでは盛んに使用されている excellent, marvellous, merely などは今日、その単語そのものは残っているが、もはや強意語としての機能は廃れている。

そこでシェイクスピアの作品に用いられている強意語を中心に、どういう語が強意語になりうるのか、それぞれの語の特徴は何なのか、なぜ現在分詞形が強意語になるのか、強意語はどのように変遷していったのかなどを詳しく考察する。

シェイクスピアに現れる強意語とそれらに関係する強意語を、形によって以下のように大別する。

A	A-1: 現在分詞形の副詞	exceeding, passing
	A-2: A-1の -ly 形の副詞	exceedingly, passingly
B	B-1: 形容詞と同形の副詞	abundant, clean, clear, cruel, damnable, excellent, full, grievous, horrible, intolerable, main, marvellous, mere, monstrous, plaguy, right, shrewd, sore, through, wondrous
	B-2: B-1の -ly 形の副詞	cleanly, clearly, cruelly, damnably, excellently, grievously, horribly, intolerably, mainly, marvellously, merely, monstrously, plaguily, shrewdly, sorely, throughly, wondrously
C	名詞形の副詞	vengeance, whoreson
D	特殊例	home

第1章 A. 現在分詞形の副詞とその -ly 形の副詞

それぞれの語の特徴を調べるために、シュミットの *Lexicon* とフランツの『シェイクスピアの英語』、OED を参考にしながら一つ一つの単語について見ていく。

A-1, PASSING (×25)

‘exceedingly, very’ の意味の *passing* は25例現れる。

- (1) Is she not *passing* fair ? TGV IV.4.148
- (5) For Oberon is *passing* fell and wrath,
Because that she as her attendant hath
A lovely boy stolen from an Indian King; MND II.1.20~22
- (6) If you call me Jephthan, my lord, I have a
daughter that I love *passing* well. HAM II.2.411~412

シュミットは ‘used only before adjectives and adverbs’ としたうえで22例を挙げている。フランツは「17Cに非常によく用いられた強意語」「ただ形容詞および副詞の前にのみ現れる」として、MND II.1.20とADO II.1.81の2例を挙げ、ブルックはMND II.1.20のみを、シェーラーもHAM II.2.412のみを挙げている。OEDにも、

B.a. In a passing or surpassing degree; surpassingly, pre-eminently, in the highest degree; exceedingly, very. (With adjs. or advbs. only.) Now somewhat arch. (OED, passing)

とあるが、なぜか OED は25例もあるシェイクスピアの例を1例ものせていない。結局、*passing* は、形容詞と副詞の前にのみおかれ ‘exceedingly, very’ を

意味する強意語である。

A-2, PASSINGLY (×0)

passingと同じ意味の *passingly* がシェイクスピアの時代にすでに強意語として存在していたことは OED からわかる。しかしシェイクスピアは *passing* を25回も強意語に用いているのに、*passingly* は1度も用いていない。

b. In a surpassing degree or manner, surpassingly; pre-eminently, exceedingly;
= passing. (qualifying adj., adv., vb.). arch.

(OED, *passingly*)

A-1, EXCEEDING (×19)

‘extremely, exceedingly’ の意味の *exceeding* は19例現れる。

- (7) You grow *exceeding* strange. MV I.1.67
- (8) So-very
well, go to, very good, *exceeding* good. 2H4 III.2.273~274
- (9) O, very mad, *exceeding* mad, in love too;
But he would bite none. H8 I.4.28~29

シュミットは ‘never joined to verbs’ として17例を挙げている。OED も ‘Pre-fixed to adjs. or advbs.’ として ADO III.4.25 を例に挙げ、この意味では ‘Very common in 17-18th c.; now somewhat arch.’ といっている。フランツは「決して動詞に伴っては現れない」として、ERR I.1.57, MV I.1.67 の2例を挙げている。つまり *exceeding* は *passing* 同様形容詞と副詞の前にのみ用いられる強意語で、17, 18世紀には非常によくもちいられた。

A-2, EXCEEDINGLY (×4)

またフランスは、シェイクスピアにおいては *exceedingly* のほうが使用度数が少ないとして、1H4 III.1.164を例に挙げている。

- (10) O, my good knave Costard, *exceedingly* well met! LLL III.1.144
- (11) In faith, it is *exceedingly* well aim'd. 1H4 I.3.282
- (12) In faith, he is a worthy gentleman,
Exceedingly well read, and profited
 In strange concealments, (...). 1H4 III.1.163~167
- (13) My money is
 almost spent; I have been to-night *exceedingly* well
 cudgell'd; and I think the issue will be, I shall have
 so much experience for my pains; OTH II.3.364~367

これらは全て *exceedingly well* の形でしか現れていない。シュミットも ‘mostly followed by *well*’ としてこの4例を挙げている。これらから、*exceeding* が形容詞と副詞のみを修飾するように、*exceedingly* は *well* のみを修飾するように思われる。しかし OED では、

In an exceedingly manner or degree.

2. Of degree: Above measure, extremely:

a. with verbs; formerly in extensive use, now chiefly limited to those that indicate emotion, feeling, or the expression of them.

b. with adjs. and advbs. Now only with the positive deg.; formerly occas. prefixed to *more*, *too*. (OED, *exceedingly*)

となっている。つまり、形容詞や副詞のみを修飾するのではなく、動詞をも修飾するのである。また ‘formerly occas. prefixed to *more*, *too*.’ ともある。しか

しシェイクスピアが *exceedingly well* の形でしか用いていないことから、この時代にはこの形が主流だったことがわかる。また、フランツが言うように *exceeding* のほうが使用頻度が高いことから ‘*extremely, exceedingly*’ を意味する強意語としては *exceeding* が一般的で、これは *exceedingly* とは異なり、決して動詞を強調することはない。

以上に見られる *passing* と *exceeding* は現在分詞形の副詞だが、この形が副詞として用いられる理由は次のようなことである。現在分詞形は動詞だけでなく形容詞としても扱われる。16世紀頃から形容詞と副詞は形のうえで区別がなくなり、あらゆる形容詞が副詞としても用いられるようになった。そのため形容詞である現在分詞形が副詞として用いられるようになったのである。また、ラテン語の *-ent* ‘*-ing*’ は現在分詞語尾で、*excellent* や *abundant* が副詞として強意語になっている。その類推で *-ing* 形も副詞として使用されるようになったのである。これとは別に *passing* は意味の上では、強意語としては不適切に思われるが、*passing* は *surpassing* ‘*greatly exceeding or excelling others*’ の語頭 *sur-* ‘*super-*’ の脱落によるものなので、強意語に用いられるようになった。

第II章 B. 形容詞と同形の副詞とその *-ly* 形の副詞

§1. 形容詞と同形の副詞とその *-ly* 形の副詞

B-1, CLEAN (×12)

‘*quite, entirely*’ を意味する *clean* は12例現れる。

- (14) Five summers have I spent in forthest Greece,
Roaming *clean* through the bounds of Asia,
And coasting homeward, came to Ephesus;

ERR I .1.132~134

- (15) Your lordship,
though not *clean* past your youth, (…)

and I most humbly beseech your lordship to

have a reverend care of your health.

2H4 I .2.96~100

(16) indeed, it is a strange-disposed time;

But men may construe things after their fashion,

Clean from the purpose of the things themselves.

JC I .3.33~35

シュミットはこれら12例すべてを、シェーラーは2H4 I .2.91を例に挙げている。フランツは「シェイクスピアの時代において、今日の日用語よりも広範囲に用いられた。今日の日用語でもそれはよく用いられる。」として Son 75.10と2H4 I .2.91の2例を挙げている。なぜ *clean* が強意語として使われるようになったのか、OED に詳しい説明がある。

II. Of degree.

5. Without anything omitted or left; without any exception that may vitiate the statement, without qualification; wholly, entirely, quite, absolutely.

This sense naturally arose from the consideration that when a substance is taken entirely out of any vessel, etc., without leaving a particle behind, the vessel is left clean, and its cleanness is a measure of the completeness of the removal. Hence *clean* was naturally used with all verbs of taking, driving, or going away, of losing, and thence of finishing up, completing, or performing any action.

a. with verbs of removal, and the like. (The use of adverbs or prepositional phrases qualifying the verb introduces const. c.)

b. with other verbs.

c. with prepositions and adverbs, as *against, without, beside, away, from, through, out, over*, etc.

d. with such adjectives as *contrary, different, other, contradictory, impossible, wrong*, etc.

(OED, *clean*)